

地域医療の現場から



へき地の急性期病床で 頑張っています！

上天草市立上天草総合病院
看護副部長 森本輝美

病院の概要

- 設立年月：昭和 39 年 7 月
 - 許可病床数：195 床（一般病棟）
 - 入院基本料：10 対 1
 - 職員数：358 人
 - （再掲）医師 18 人
 - 看護師 111 人
- （平成 25 年 1 月 1 日現在）



病院全景。天草五橋で九州本土と結ばれた上天草島にあり、目の前には不知火海が広がる

複雑な急性期病棟の役割

当院のある上天草市は、熊本県の西部、天草の玄関口にあたり、天草・霧島国立公園を含む風光明媚（めいび）な土地です。人口が3万2千人弱、少子高齢化の進む市の端に上天草総合病院は位置しています。

病床数 195 床（療養病床 46 床を含む。）、入院基本料 10 : 1 で、PPC 看護体制（149 床の一般病床を内科、外科等科にかかわりなく患者さまの重症度により治療する病棟を決めている。）を取っています。当院の周囲、車で 45 分以内には総合病院はなく、急性期から慢性期・終末期までを当院および関連施設で担っています。

このような状況の中で、36 床の急性期病棟（8 床の救急病床含む。）の役割は複雑です。地域の病院で実施できる治療・看護にはおのずと限界がありますが、各科の先生方が精いっぱい努力をされています。そのため、患者さまの重症度の幅は広く、全麻術後の患者さまから、PCI 後、重症肺炎、骨折術後、認知症等、各科が混在して治療されています。



救急病床の職場風景

日ごろはどうか地域（自宅）で生活できている方でも、持病が悪化したり、他の疾患を併発したり、また、転倒による骨折などで入院されます。入院された当初は普通であった方が、時間が経過するにつれ、ことに夕方になったりすると「もう帰る」「何すつとか!」「せんでよか」などと大声を出したり、そわそわと落ち着かなくなりうろうろしたりと大変です。転倒しないようにと話を伺ったりして対応しますが、なかなか落ち着かず治療を受けることが困難になります。夜になっても眠ることができず、ナースステーション内に車いすごと、ベッドごとお引越しをされる方も多々あります。輸液をしても少し目を離れたすきに自己抜去されたりで、対応の難しさを痛感しています。

見守りの眼があるだけでもいいのに……。マンパワーが欲しい!!と思うことしきりです。しかし、数日が経過し症状が改善するとともに、私たちの顔を覚えていただき、笑顔が見られたり、お礼の言葉が返ってくるようになったりしたときは、本当に良かったと喜びを感じます。

患者や家族の気持ちに寄り添って

また、上天草地域は独居の高齢者や高齢者のみの夫婦世帯が多く、緊急時にご家族との連絡がなかなか取れなかったり、患者さまご本人とご家族あるいはご家族内の意見の一致が見られなかったりと、調整者の役割が難しいこともあります。地域柄、離島も診療圏内にありますので、救急艇（船の救急車）で来られ、お帰りになる手段がなく一泊される場合や、時には、救急車に入院の荷物までも積み込んで来院され、入院するほどではないとお伝えしても、「帰っても看られない」の一点張りのご家族もいらっしゃいます。

多くの高齢者が、長年住み慣れた土地で療養したい、過ごしたいと考えています。しかしながら、人生の終末に近い方の人としての当然の思いが、195床の病床ではかなえられないことが多く、その対応に苦慮することも多々あります。時には、介護する家族の希望が優先されることもあり、やっと急性期を乗り切った患者さまに対し、申し訳のない切ない気持ちになることもあります。できるだけ、入院早期から医療相談員に入ってもらい、ご本人やご家族の希望を聞き、調整を図るとともに、病状が落ち着いた時点で、慢性期病棟への移動をお願いしています。

上天草地域唯一の総合病院にある急性期病棟の役割は、最大限の救命救急は当然として、できる限り入院をお断りしないことと、患者さまとご家族が納得できるような関わりを持つことであろうかと考えています。

不安もやりがいも感じながらへき地で頑張っていく

看護師の立場としましては、必要な知識・技術が浅く・広くなりがちなのが不安の一つです。新人看護師が最初に悩むのも、「何から学べばいいの?」という点ではないかと思っています。しかし、重症で運ばれて来た患者さまの心拍が再開した瞬間、意識が回復されたとき、回復されて慢性期病棟へ手を振りながら運ばれて行くときが、自分たちの仕事に対する誇り、やりがいを感じる時でもあります。

へき地だからこそ必要な急性期病棟であることを自覚して、今後も頑張っていきたいとスタッフ一同考えています。



Dr、Ns、PT、相談員による
リハビリカンファレンス風景